

令和3年度（2021） 第3回 国語 入試問題解説

①の説明文は好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』からの出題です。私たちがあたりまえとって過ごしている日常世界を、社会学を使って見つめ直してみようとする文章です。

問一は1頁上段15行目「さまざまなゲーム」の話を通じて説明しようとしたこととしてふさわしいものを選ぶ問題です。本文では、1頁上段21行目から同22行目より、ゲームをしている時、筆者は日常生活を離脱し、ゲームで展開される世界に没入していますが、1頁上段26行目から同27行目より、ひと段落ついた瞬間、仮構の現実から私自身が日常生活世界へと引き戻されてしまうことが書かれています。これらに該当するのは、イになります。アは、ゲームの世界が「質量ともに圧倒的な日常生活世界の一部である」の部分が誤りです。ウは、ゲームの中毒性や「現実と仮構の混同」について本文にはふれられていません。エは、日常よりも仮構が優れているという比較はされていないので、誤りです。

問二は1頁下段52行目「相手が用意してきたことをすべて話し終えたのを確かめ、さらに問いかける」の理由としてふさわしいものを選ぶ問題です。1頁下段57行目から「今、ここ」で生身の他者と向き合うことでしか得られないコミュニケーションの中身があるという信奉が息づいていると書いてあります。つまり、①生身の他者として出会いたいと思っている、②自分の言葉で話すのをきくことがコミュニケーションの中身にたどり着く方法であると思っている、の二点をまとめてほしいと思います。

問三は2頁上段65行目「しんどい」の理由としてふさわしいものを選ぶ問題です。1頁下段60行目にあるように「今、ここ」で“生身の他者”と出会う機会が無数に満ちているのが、日常生活世界です。しかし、それらすべてに対処するのは難しいので、決まりきった対応が必要となると書かれています。このことから、正解はアです。日常生活世界が「至高」な理由の二つ目は、“生身の存在”として他者と出会うことであると1頁上段30行目で述べていますので、イの「生身の他者と出会う日常生活は『至高』ではないから。」の部分が誤りです。ウは、「しんどい」ことの理由として、「決まり切った」「あたりまえ」に生きることが大切とは述べていません。エは、『至高』がもつ今一つ重要な意味を無視してしまう」ことは、本文で述べられていません。

問四は2頁上段72行目「あたりまえ」について、あたりまえに日常を暮らすためにわたしたちがしていることを説明する問題です。傍線4の前の部分を見ると、決まりきった他者理解や交信の仕方をほぼ無意識に支障なくこなしていくことで「あたりまえ」に生きることができると書いてあります。しかしながら、指示は、傍線4より後の部分なので、「決まりきった他者理解や交信の仕方」にあたるものを探すと、2頁下段98行目に一点目として『類型的』知を用いて他者を理解すること、2頁下段103行目に二点目として、各場面では他者に対して適切にふるまうための『処方箋』的な知が書かれています。これらをまとめていきます。

問五は「こうした日常的な他者認識を『類型的』な理解と呼んでいます。」について、類型的な理解とはどのようなものを説明する問題です。2頁上段89行目「周囲の他者にどのような違いや特徴があるとしても、かれらを『交差点を渡る人』以上でも以下でも認識する必要はなく、ただ『交差点を渡る人』

として私の前に立ち現れていればいい」の部分から、私たちは「交差点を渡る人」であることを認識し、それ以外の違いや特徴（男や女とか背が高いとか）は認識しないという内容が導かれます。これを一般化して答えます。

問六は空欄[A]から[D]に適切なことばを入れる問題です。[A]にはエ、[B]にはイ、[C]にはア、[D]にはウが入ります。

問七は漢字の書き取りです。楷書で丁寧に書く必要があります。

問八は本文の内容に合致しているものを選ぶ問題です。1頁上段8行目から始まる段落には、日常生活世界とは、私たちが拠りどころとして生きる場所であり、多様で異質な現実と向き合って生きていることがかかれています。また、日常生活世界について、1頁上段30行目に「他者と直接出会える」と書かれているので、これら2点の要素が入っているエは正解になります。アの、「至高の現実」と呼ばれることの理由は、普段の雑事を忘れさせるだけの力を持っているからではありません。イの「多様なあたりまえに焦点をあてている日常生活世界に目を向けていく」のは2頁下段114行目「私たちの社会や他者との関係、繋がりのありようなどを振り返って考察する」際に必要なものであって、選択肢のように「どこを拠りどころとして生きているかを考える際」に必要なわけではありません。ウは、1頁下段61行目で他者との出会いが無数に満ちているとは書かれていますが、選択肢の「知恵や習慣が無数に存在している」とは述べていません。

続きまして[2]の物語文の解説に移ります。三輪裕子『優しい音』からの出題です。

問一は4頁上段1行目傍線1「千波と澄香はいつも連れだって歩いているようになった。」ことにより生じる環境の変化に対し、千波が感じたこととしてふさわしい内容を選ぶ問題です。4頁上段12行目からの連続する2つの段落で、千波の中には「晴れがましい気分」、つまり気恥ずかしさと、「居心地のいい所でもなく」という感覚が内在していると判断できるため、正解はウです。アは「清々しさ」、イは「自分が主役になったような高揚感」、エは「劣等感」がそれぞれ本文の内容と食い違うため、誤りです。

問二は4頁上段19行目傍線2「間違ったこと」を説明したものとしてふさわしくない内容を選ぶ問題です。4頁上段21行目から始まる委員決めのエピソードを確認すると、「千波がクラスメイトに声をかけて、澄香がクラス委員になれるように取り計らう」という内容は書かれていないため、正解はウです。

問三は4頁下段40行目傍線3「今回だけは、自らすすんで図書委員に立候補しよう。」の理由を説明する問題です。4頁下段55行目から63行目までに千波の考えが記されているので、「やりがい」と「引継ぎ」の2点をまとめて記述します。設問に合わせて、文末は「～から。」とする必要があります。

問四は空模様に関連する慣用句の問題です。一はア、二はウ、三はエ、四はイ、五はオです。

問五は5頁下段 102行目傍線5「頭にカーッと血が上った。」ときの千波の様子を説明する問題です。

「頭に血が上る」という表現は興奮など感情が高まったときに使用される表現であることを念頭に、傍線5以降を読み進めると、同 103 行目「夢にも思っていなかった。」や同 106 行目「一体どうして… …。」といった表現が出てきます。よって、ここから動揺という様子を読み取ります。

問六は6頁上段 150 行目傍線 6「心の中はすっきりと晴れなかった。」の理由を説明する問題です。直前に、亜矢と澄香に声をかけられたことで「ホッとしたものの、」という前置きがあることから、亜矢と澄香からの声掛けの内容は、千波の心の中が晴れない原因と関連していると考えられます。よって、6 頁上段 134 行目から始まる連続した2つの段落で感じた、亜矢への「申し訳ないことをした」という気持ちと、澄香に「批判されたような気がした」という2点が、千波の中ではまだ解消しきれていないと判断します。設問に合わせて、文末は「～から。」とする必要があります。

問七は空欄A～Dに適切な語句を入れる問題です。Aがイ、Bがア、Cがウ、Dがエです。

問八は本文の内容に合致しているものを選ぶ問題です。5頁下段119行目から始まる連続した2つの段落の内容と一致するエが正解です。アは「後でそれを嘆いてしまう」、ウは「常に自分がすべきことや正しいと思うことは何かを考え」が本文に書かれておらず、イは「自分なりの意思を持たずにいる」が本文の内容と食い違います。